

インタビュー 2

リモートで
インタビュー



高木 志帆さん
(兵庫県尼崎市)

観音寺市出身。100メートル・200メートル競走で四国記録・県記録を持つ。

オリンピックを 身近に感じてほしい

高校から陸上を始めて、大学卒業後は企業の実業団に入り、オリンピックを目指していました。今は現役を引退しましたが、小学生向けの陸上教室のコーチをしたり、陸上イベントの手伝いをしたりしています。

高校の陸上部の先生が聖火リレーに応募してくれて、決まったと連絡があったときはびっくりしました。オリンピックは本当に開催できるのかなという気持ちも半分ありますが、開催できたらしっかり参加したいと思います。

聖火リレーが終わったら、トーチを持って帰って子どもたちに見せてあげようと思っています。私が走ることで、オリンピックを身近に感じてほしいです。



四国高校選手権や近畿陸上選手権など各大会で優勝

今は週に2回、作業療法士の先生に後ろから支えてもらい、前に体と足を押し出す練習をしています。体がぶれないようにバランスをとり、先生の動きに合わせてイメージトレーニングします。あとはヘルパーさんや家族と一緒に、密にならないよう気を付けながら、平日は毎日体を動かすようにしています。延期が決まった後、実際に外に出るのは初めてで、こんな

世界やったんか、つてかなり新鮮でしたね。リレー当日は自分でトーチを握りたいので、後ろで支えてくれる人、握る手を支えてくれる人と、3人で歩く予定です。

歩く姿で伝えたいこと
このような大きなけがをしたら、ほとんどの人は立って歩くことをあきらめてしまいます。僕が歩くことで、やりたいことを買っているところや、あきら

めない姿を発信したいです。それが、今まで助けてくれた人、頑張れよと言ってくれた人たちへの一つの恩返しになるかなと思っています。

当日は時間の関係などで、もしかしたら歩くのが難しくなるかもしれませんが、できるだけ



歩く練習の様子

自分の足で歩きたいと思っています。ランナーに選ばれて嬉しい反面、ちょっと悩むこともありま。大会組織委員会元関係者のジェンダーに関わる発言や、コロナでエッセンシャルワーカーの人たちが大変な思いをしているのを考えると、辞退した方がいいのかとすごく迷いました。それでも、せっかくなので選んでもらえたのだから、その責任をしっかりと果たし、自分の思いを伝えたいと思います。

聖火リレーランナーインタビュー

観音寺市を走るランナーのうち、一般公募で選ばれた2人にお話を聞きました。

インタビュー 1

毛利 公一さん(観音寺町)

社会福祉法人ラーフ理事長。アメリカ留学中に事故でけい髄を損傷し、自由に動くのは首から上だけに。障がい者・高齢者の介護事業・就労支援などに取り組むほか、講演や執筆活動も行う。



やりたいことを 貫く姿を見てほしい

オリンピックは憧れの存在

元タアスリートで、陸上の棒高跳びを中学校から大学まで10年ぐらいやっていました。やっぱり夢見ていたのが、オリンピック。あの舞台に立ちたいと思って競技を頑張っていました。結果的にそこまでいけるレベルにはなれませんでした。

オリンピックは僕にとって憧れの存在で、けがをした後も何らかの形で関わりたいと、棒高跳びの審判の資格を取りました。しかし、審判として実績を積む時間がなく、オリンピックには間に合わないと思っていました。聖火リレーの募集があり、違う形でも関わることができるようなら応募しました。



観音寺第一高校在学中にインターハイ3位、大学時代に関東インカレ優勝など、数々の実績を持つ

コロナで聖火リレーが一度延期になりましたが、来年はできるだろうと楽観的でした。来年またチャンスがあるから、ちゃんと練習しておこうと。

一昨年の12月ぐらいにランナーに選ばれましたが、その時歩ける距離が20、30メートルくらいだったんです。それを4月までに200メートルまで伸ばさないといけない、トーチをどうやって支えたらいいかなど、いろんな課題があつて、短い期間でそれらをクリアしていくのは、結構きついなと思っていました。だから、リレーが延びたことは、僕にとってはありがたく、その間に体力を付けることができました。